

〈翻訳〉

# アルブレヒト・レーマン ドイツ社会とクラブ・組合

——民俗学の視点から——

河野 真 (訳・解説)

## 目次

はじめに	85
1. フェルアイン (クラブ・組合) と民俗行事	87
2. 組合と町村体研究	92
3. 組合とメンバーの人生	98
訳注	105
[解説]	111

## はじめに

民俗学徒によるフェルアイン組織 (クラブ・組合 : 以下では組合の訳語で統一する) との取り組みは、民俗学の分野で1960年代半ばから起きた伝統研究・上古学から\*経験型文化研究への転換の結果であった。それまでは、関心は主に、過去の数世紀の民俗文化の目にもあざやかな名残りに向かっていった。やがて研究の視角に、ヨーロッパの文化圏のなかの社会的下層の生活関係やその文化が入ってきた。日雇い人・農民・手仕事職人・労働者の民俗行事・習慣・行動・物の見方である。具体的な研究には、過去と現在の文化的表出に関係するものもあれば意識形態にもかかわるものもあった<sup>(1)</sup>。したがって今日では、フォルクスクンデ (民俗学) は、研究分野とし

(1) 今日の民俗学の設問と方法については次の諸文献を参照, Hermann BAUSINGER, *Volkskunde. Von der Altertumforschung zur Kulturanalyse*. Berlin und Darmstadt 1971. 次の拙訳を参照, 『フォルクスクンデ/ドイツ民俗学—上古学の克服から文化分析の方法へ』文叢堂2010; DERS., *Zur Spezifik volkskundlicher Arbeit*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, 76 (1980), S. 1-21.; Helge GERNDT, *Kultur als Forschungsfeld*. München 1981.; Günter

ては、従来の社会科学の諸分野や歴史学と諸課題を共有している。同じことは、研究の仕方にも言うことができる。ヨーロッパの民俗文化に係る文書資料的研究や画像・実物の研究に加えて、実地観察と口頭での聞き取りである。

パースペクティヴの転換以来、\*有機体的な物の見方との訣別が可能になった。また、いわゆる\*《きづなによる》とか《ゲマインシャフト的》とかによる組織、たとえば《秘密結社》<sup>(2)</sup>やギルド<sup>(3)</sup>のような組織体、それを幽暗な起源とする集団形成の面から専ら取り組むことから解放された。それに代わって、目的合理性に根拠をもつ組合のようなアソシエーションが研究対象となってきた。しかしこれらの社会的現実の認識も、最近まで、明らかな誤謬でつままれていた。\*フェルディナント・テンニエスの概念《ゲマインシャフト》<sup>(4)</sup>を\*分析のカテゴリーとしては認めないだけで終わり、それが社会の実情を名指すことを放置したのは過失であった。そのなかで、近年、他の新しい研究領域と並んで、組合研究をも可能にする設問地平が開かれたことが、学問史の面からよく取り上げられる<sup>(5)</sup>。

Hermann BAUSINGER, *Vereine als Gegenstand volkskundlicher Forschung*. In: Zeitschrift für Volkskunde, 55 (1959), S. 98-104. ヘルマン・パウジンガー「民俗学の研究対象としてのフェルアイン」

Herbert FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg. Ein Beitrag zur Geschichte und Volkskunde der Geselligkeit*. Hamburg 1968. ヘルベ

---

WIEGELMANN, Mathias ZENDER, Gerhard HEILFURTH, *Volkskunde. Eine Einführung*. Berlin 1977.

- (2) Will-Erich PEUCKERT, *Geheimkulte*. Heidelberg 1951.
- (3) Konrad KÖSTLIN, *Gilden in Schleswig-Holstein. Die Bestimmung des Standes durch „Kultur“*. Göttingen 1976.
- (4) Ferdinand TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. Darmstadt 1972, S. 228. [邦訳]フェルディナント・テンニエス (著) 杉之原寿一 (訳) 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粋社会学の基本概念』理想社 昭和29年
- (5) [訳者補記] 頻繁に言及される論者ならびに文献のため原注を本文に移した。なおヘルマン・パウジンガーの短い寄稿はクラブ・組合に関する問題提起であり、それ以前にパウジンガーは調査報告『新しい移住団地』(初版1959, 後掲注14)においてフェルアインを重点項目の一つとしており、報告の理論篇でも論じている。ハインツ・シュミットとフロイデントールについては以下に詳しく取り上げられる。またケーレ=ヘーツィンガー女史のこの論考が掲載された『ライン民俗学報』のこの号は町村体研究の特集であった。

ルト・フロイデンタール『ハムブルクの組合：集いの歴史と民俗学』  
Heinz SCHMITT, *Das Vereinsleben der Stadt Weinheim an der Bergstraße. Volkskundliche Untersuchung zum kulturellen Leben einer Mittelstadt*. Weinheim 1963. ハイツ・シュミット『ヴァインハイム市（ベルク街道）の組合：中規模都市の文化活動に関する民俗学調査』

Christele KÖHLE-HEZINGER, *Gemeinde und Verein*. In: *Rheinisches Jahrbuch für Volkskunde*, 22 (1978) 2. Halbband, S. 181–202. クリステル・ケーレ＝ヘーツィンガー「町村体とクラブ・組合」

## 1. フェルアイン（クラブ・組合）と民俗行事

社会科学諸分野の学際的相関のなかでは、システムティックな組合研究が欠けていることが屢々嘆かれてはいるが<sup>(6)</sup>、民俗学の観点による二つのモノグラフィーが広く注目されている。<sup>\*</sup>ハイイツ・シュミットの『ヴァインハイム市（ベルク街道）の組合：中規模都市の文化活動に関する民俗学調査』と、<sup>\*</sup>ヘルベルト・フロイデンタールの『ハムブルクの組合』である。後者は民俗学の分野での組合研究としては最もよく知られ、特に資料面では充実している。と共に、理論の部では、組合の歴史と現在の現象形態をないまぜにしていることはともかく、選ばれた対象が常に適切というわけでもない。それは、組合組織への著者の原理的な評価に起因する。フロイデンタールは、組合の規則原理として常に調和（Harmonie）を見ていたのである<sup>(7)</sup>。多くの組合が示す排他性にも、社会総体の分節化と相照らす内部構造にも、著者は注意を払っていない。フロイデンタールは、組合を《身分政策的にはニュートラル》とみなすのである<sup>(8)</sup>。そうしたロマンティックな観点のなせるところ、組合活動において非常に多くの

---

(6) Hans-Jörg SIEWERT, *Zur lokalpolitischen und sozialen Funktion der Vereine in der Gemeinde*. In: Hans-Georg WEHLING (Hg.), *Dorfpolitik*. Opladen 1978.

(7) H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5)

(8) H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5), S. 463.

場合その特徴となっている軋轢や覇権争いが視野から抜け落ちたのは不思議ではない。フロイデンタールの高らかなテノールの拠って来た所以は、組合の自己発言を最も重要な資料としたことにある。言い換えれば、他の文書資料（たとえば裁判調書）は視野に入っていない、《単純な(=素朴な)》組合メンバーの立ち位置も注目されていない。

しかし民俗学からの組合研究の重点は、包括的な社会研究ではなく、町村体研究にある。組合が町村体の日常生活や政治的文化にもつ意味を問い、また組合メンバーの生き方のなかでの組合の機能を問うのと並んで、組合が民俗学の伝統的な調査領域に及ぼす影響に、研究は集中する。流入民の文化的統合への組合の意味あるいは民俗学の金城湯池とも言うべきカノンの項目（民俗行事や民謡）に沿った調査領域への組合組織の作用にかんする研究がこれに属している。その他、組合活動の独特の文化的内容・形式も問われよう。たとえば組合役員の言葉の形式や機能<sup>(9)</sup>、さらに組合が掲げる特定のテーマの位置づけやシンボリックな演出といったものである<sup>(10)</sup>。

ふるさと喪失と流入地域の社会的・文化的環境への関係に入りこむ生き方の観点から見ると、ルール地方に移住した東部ドイツ人やポーランド人<sup>(11)</sup>や1945年から西ドイツへ逃れた引揚民については、組合の意義をも射程におきつつ民俗研究者によって描かれてきた。流動性の原因は違っていながら、この両例（ルール地方への人々の流入と戦後の東欧からのドイツ人引揚民）では、統合の歩みは、組合がそれに関与する限りでは似通っていた。出発点は、流入民どうしだけのグループで、彼らは自分たちの文化的独自性をサブカルチャー的なふるさとクラブにおいてかみしめることを切望し

---

(9) Hermann BAUSINGER, *Deutsch für Deutsche. Dialekte, Sprachbarrieren, Sondersprachen*. Frankfurt/M. 1972, S. 131-141. [邦訳] 浅井幸子・下山峰子 (訳) 『ことばと社会』三修社1982. ; H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5), S. 514-547.

(10) H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5), S. 496-513; H. SCHMITT, *Das Vereinsleben der Stadt Weinheim an der Bergstraße* (前掲注5), S. 182-193.

(11) Klaus TENFELDE, *Sozialgeschichte der Bergarbeiterschaft an der Ruhr im 19. Jahrhundert*. Bonn-Bad Godesberg 1977, S. 383-386. [訳者補記] クラウス・テンフェルデ (Klaus Tenfelde 1944-2011) ライン地方エルケレンツ (Erkelenz) に生まれ、ボーフムに没した社会史家。ボーフム大学教授。

た<sup>(12)</sup>。この文化保全の組合は、世代交代の波を受けながらもその犠牲にならなかつたところでも、次第に当初の党派性を失い、古くからの地元民と文化との交流過程に自己を開いた。そうではあれ、たとえば19世紀末にルール地方で結成されたシレジア出身者の幾つかの組合が今日まで存続している例もある<sup>(13)</sup>。もちろん、その道筋は別であった。異なった住民グループの間の結婚や集いだけでなく、それ以外にも流入民は地元の組合の状況に徐々に合わせていった。特に村では、組合活動が政治関係や町村体の権威体系や文化活動と強くむすびついているため、組合は、流入民の統合にとっては常に特別の重みをもっている<sup>(14)</sup>。今日の労働流入民の場合は、\*ハリル・ナルマンの言う《一時の同化》ではすまないだけに、流入したエスニック・グループの永続的な統合に果たす組合の機能が改めて問われている。なかでも、大都会のトルコ人のあいだでは、組合に近似したグループ形成がすでに起きており、それらはたいてい\*宗教的なゲマインシャフトの気圏にもある。小さな町村体では、一歩踏み出すには慎重なことが目立つ。とは言え、そこでも地元民の組合が新来の流入者に門戸を開いている<sup>(15)</sup>。そうではあれ、19世紀のエスニックな流入・同化過程と同じで、それが起きるのは第二世代になってからである。いずれにせよ、\*組合スポーツへの参加が、村の組合活動への統合の第一歩であることが屢々である<sup>(16)</sup>。そこでようやく始まるのだが、そうした組合への歩みはまた永続的

(12) Wilhelm BREPOHL, *Industrievolk im Wandel von der agraren zur industriellen Daseinsform dargestellt am Ruhrgebiet*. Tübingen 1957, S. 142-145, S. 154-167.; Franz KRINS, *Zur Geschichte der Schlesier-Vereine in Nordrhein-Westfalen*. In: Jahrbuch für Volkskunde der Heimatvertriebene, 4 (1958), S. 163-189.; G BIRK, *Zur Entwicklung des regionalen Vereinswesens, unter besonderer Berücksichtigung des Kreises Wanzleben*. In: H. J. RACH und B. WEISSEL (Hg.), *Bauern und Landarbeiter im Kapitalismus in der Magdeburger Börde*. Berlin (Ost) 1982, S. 163-214, hier S. 199-200.

(13) Franz KRINS, *Zur Geschichte der Schlesier-Vereine in Nordrhein-Westfalen* (前掲注12).

(14) 次を参照, Hermann BAUSINGER, Marcus BRAUN, Herbert SCHWEDT, *Neue Siedlungen*. Stuttgart 1959., 2. Aufl. (増補版) Stuttgart 1962, S. 174-205.; Albrecht LEHMANN, *Das Leben in einem Arbeiterdorf - Eine empirische Untersuchung über die Lebensverhältnisse von Arbeitern*. Stuttgart 1976, S. 74.

(15) Hermann BAUSINGER, *Assimilation oder Segregation? Integrationsschancen ausländischer Arbeitsmigranten in der Bundesrepublik*. In: Der Bürger im Staat 32 (1982) Heft 3, S. 201-205, hier S. 205.

(16) ニーダーザクセン州の村落部の諸所でこの種の動きが観察される。

な社会的・文化的統合への重要な経由地でもある。

民俗学の中心的な研究領域である民俗行事研究にとっても、組合組織は、重要な研究フィールドとして現れる。なぜなら民俗行事の多くは、19世紀からは、組合が《面倒をみる》ことなくしては存続し得なかったからである。そのさい、ふるさと組合などによる民俗行事との取り組みが主にツーリストに向けて企劃されるのか、それとも主要にはメンバーが集って自分たちのためにおこなうのかは、どちらであっても基本的にはそう違わない。1960年代の\*フォークロリズム論議が正面から明らかにしたように、非常に多くの民俗行事は、観光のなかで前面に出たショー効果に最初から属している<sup>(17)</sup>。

これには二つの事例がある。シュレースヴィヒ=ホルシュタインで17世紀以来文書資料によって裏付けられ、ギルドのなかで《男の盟約》として年齢階梯によって実施され送り継がれてきた行事に、\*輪突き騎馬行事がある。それは、19世紀からは、保存に意をもちいる組合組織の保護の下に完全に入った<sup>(18)</sup>。カーニヴァルとファスナハト〔訳注〕カーニヴァルの伝統的な形態も、今日では組織された群衆の催し物であることを私たちが知っている通り、19世紀前半から設立されていったファスナハト組合を抜きにしては考えられない。近年のマイנטツ<sup>(19)</sup>やテュービンゲン<sup>(20)</sup>での調査研究は、空想と単線的な因果関係にたよってファスナハトの起源をた

---

(17) 次を参照, Hans MOSER, *Vom Folklorismus in unserer Zeit*. In: Zeitschrift für Volkskunde, 58 (1962), S. 177-209.; Hermann BAUSINGER, *Zur Kritik der Folklorismuskritik*. In: *Populus revisus. Beiträge zur Erforschung der Gegenwart*. Tübingen 1966, S. 61-75.; Gottfried KORFF, *Die Regionalisierung von Kultur*. In: Konrad KÖSTLIN und Hermann BAUSINGER (Hg.), *Heimat und Identität. Probleme regionaler Kultur*. 22. *Deutscher Volkskunde-Kongreß 1979*. Neumünster 1980, S. 25-38.

(18) 古典古代の新兵訓練から現今に至るこの民俗行事の歴史についてはクレツェンバッハーの研究を参照, Leopold KRETZENBACHER, *Ringreiten, Rolandspiel und Kufenstechen. Sportliches Reiterbrauchtum von heute als Erbe aus abendländischer Kulturgeschichte*. Klagenfurt 1966. この民俗行事のフェルアインによる保存活動については同書の当該箇所を参照, S. 173.

(19) Herbert SCHWEDT u.a., *Analyse eines Stadtfestes. Die Mainzer Fastnacht*. Wiesbaden 1977.

(20) *Narrenfreiheit. Beiträge zur Fasnachtforschung*. (Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen, Band 51). Tübingen 1980.

ずねる当て推量の議論<sup>(21)</sup>を脱して、祭りの生きた条件を問うようになった。そこで露わになったのは、目的合理性、すなわち組合組織のオーガニゼーション原理が時の経過と共に祭りの伝統的な表出形式を押し退けるさまであった。言い換えれば時宜に合うプランニングが内容となり自己目的となる様である。カーニヴァル団体による行事次第の誰の目にも明らかなピラミッド的な組み立てと最後に来る若返り（〔訳注〕再生儀礼としての祭りという通念）、祭りにおけるこうした《計画された自然発生性》（そこにはコマーシャルイズムの関心も重なり毎年テレビ中継によって公開の記録にもなる）がカーニヴァルの全てであるわけではない。しかし、プランニングによって進められる《オフィシャルな》カーニヴァルの動きからは一般的なトレンドが読みとれる。すなわち、組合が現代社会の構造原理として伝統保存において作用する方向が露わになるのである。\*《さかさまの世界》の規律もそれによっている。一口に言えば、社会は《反対世界》を我がものとするのである。

しかし、伝統的な\*儀礼と行事の保存をめぐる組合の理知的なプランニングの赴くところは転倒だが（〔訳者補記〕見かけは自然ななりゆきだが実際は人為）、百パーセントそうであるわけでもない。村落部では、おおよそ19世紀半ばから組合組織が発展した。それは、伝統的な民俗行事がなお実際の暮らしの多彩な構成素であった時期である<sup>(22)</sup>。それゆえ組合は、持ち伝えられた諸形態をクーデターさながら我が物としたのではなく、むしろ地元暮らしの聯関に自己を慎重に組み入れたのだった。しかしまた組合が、民俗行事の伝統的な担い手グループ、たとえば\*隣人組や若者たちのグループにたちまち取って代わったのも一方の事実であった。20世紀初めにはさらに進んで、教会関係の祭りや集まり、さらに世俗の祭りや集まり

(21) しかし近年、祭りの起源をめぐる議論が再び盛んになったことについては次の諸文献を参照、Hans MOSER, *Kritisches zu neuen Hypothesen der Fasnachtsforschung*. In: *Jahrbuch für Volkskunde*, 5 (1982), S. 9-50; D. R. MOSER, *Nationalsozialistische Fasnachtsdeutung. Die Bestreitung der Christlichkeit des Fasnachtsfestes als zeitgeschichtliches Phänomen*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, 78 (1982) Heft 2, S. 200-219.

(22) これについては次を参照、Ernst M. WALLNER, *Die Rezeption stadtbürgerlichen Vereinswesens durch die Bevölkerung auf dem Lande*. In: Günter WIEGELMANN (Hg.), *Kultureller Wandel im 19. Jahrhundert. Verhandlungen des 18. Deutschen Volkskundekongresses 1971*. Göttingen 1973, S. 160-173.

も、すでに組合が引き受けていた。組合は、それ独自の祭り、すなわち歌唱祭や射撃祭や消防団祭りをつくっただけでなく、\*献堂祭(秋祭り)のような伝統的な機縁でのプランニングをも買って出た。復活祭のファイアーにメンバーが手に手に小枝をたずさえてあつまるのもそうである。村の半公共的なできごと、結婚式の行事や葬儀でも、組合から人員が来ることによってはじめて、それぞれの特徴がつけられる。

民俗行事研究と同じく、民謡研究でも組合の活動を考慮しなければならない。メルヒェン・伝説研究におけるのと同じく、歌謡の場合でも、民俗研究者が先ず取り組むのは、形態やジャンルの側面からの文献研究である。しかし、現在が特にそうだが、(歌われる実態など)歌謡が生きている諸条件を問うことの重みが増しているなか、歌唱組合の影響が見過ごされてはならない。なぜなら19世紀初め以来、先ずは都市において、また部分的には村落部においても、最初の歌唱組合(男声コーラス)の結集がみられ、その影響が大人による歌唱を決定的にしたからである。そのさい、組合はそのうたう歌謡を口頭で送り伝えたのではない。すでに早くから男声コーラス向けの特別の歌集がつくられていたと断言してよく<sup>(23)</sup>、それが次の動きに関係した。喉自慢大会が、時にはコンクールの形をとって頻繁に開催された<sup>(24)</sup>。それが進んでいった先は、文化的な接触や交流だけではなかった。同時に様式化へも向かった。伝統のかかる変遷とコーラス・コンクールの出会いを通じて、形態面での多様性が失われ、早くも19世紀半ばには判で捺したような定番化が起き、それには時人がすでに嘆きを漏らしていた。

## 2. 組合と町村体研究

次に民俗学の側からの町村体研究が来る。古いタイプの町村体・地域研

---

(23) これについては次を参照, Eduart STRÜBIN, *Baselbieter Volksleben. Sitte und Brauch im Kulturwandel der Gegenwart*. Basel 1952, S. 170. [訳者補記] シュトリュュービン (Eduart Strübin 1914-2000) はバーゼルの地元の民俗学者・民俗文物収集家

(24) 参照, E. STRÜBIN, *Baselbieter Volksleben* (前掲注 23), S. 167-170.; Hermann BAUSINGER, *Volkskultur in der technischen Welt*. Stuttgart 1961, S. 67f. (河野・訳2005, p. 98)



究は、ここでとりあげている種類の問題を顧慮しなかった。それは偏に組合組織に注意がはらわれなかったことに起因する。町村体のなかでの組合の位置と個々のメンバーにとっての組合の意義が問われるようになるのは1950年代末で、次いで1960年代を通じて重みを増していった。ちなみに町村体研究の大部分は村の調査であり<sup>(25)</sup>、また専門分野としての民俗学のパースペクティブの転換が始まると共に、名残りを追う研究から経験型の文化分析へと変わっていった。1950年代末の社会学の状況も似ており、それについては社会学者\*クリスティアン・フォン・フェルバーがまとめている<sup>(26)</sup>。それによっても知られるように、\*経験型社会学の設問と方法を実際の調査研究のなかで試し、民俗学が必要とするところへ発展させることが課題とされた。村落規模で社会的形成体を鳥瞰する研究なら、民俗学には打ってつけであることは根拠を挙げるまでもない。

今日の状況では、民俗学の町村体研究が、社会学や地域史研究となどの隣接学とどこで区分されるのかといった問いは、ほとんど不可能で、またそもそも理にかなっていてもいない。方法論でも内容面でも、重なりは頻繁だからである。たとえば民俗学における近年のミクロな地域研究は、(この専門分野の伝統でもあるが) 文化的諸事象・風土特性・地域史などの相関に注意を払ってきた<sup>(27)</sup>。しかし同時に、個々の研究では、《社会学の悉皆調査》の設問地平を踏まえることになった<sup>(28)</sup>。そうではあれ、民俗研究では、非常に多彩であるのはそれとして、一点ではまとまりがみられ、それが特徴となっている。すなわち、一人一人の人間(この場合は組合のメン

(25) ドイツ民俗学会の次の大会報告にそのドキュメントを見ることができる。参照, Günter WIEGELMANN (Hg.), *Gemeinde im Wandel. Volkskundliche Gemeindestudien in Europa. Beiträge des 21. Deutschen Volkskundekongresses 1977*. Münster 1979.

(26) Christian von FERBER, *Die Gemeindestudie des Instituts für sozialwissenschaftliche Forschung, Darmstadt*. In: René KÖNIG (Hg.), *Soziologie der Gemeinde*. 3. Aufl. Köln-Opladen 1966

(27) たとえば次を参照, Ruth E(dith) MOHRMANN, *Volksleben in Wilster im 16. und 17. Jahrhundert*. Neumünster 1977.; Utz JEGGLE, *Kiebingen - Eine Heimatgeschichte. Zum Prozeß der Zivilisation in einem schwäbischen Dorf* (Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts, Bd. 44). Tübingen 1977.

(28) Albert ILLIEN und Utz JEGGLE, *Leben auf dem Dorf*. Opladen 1978.; Max MATTER, *Wertsystem und Innovationsverhalten. Studine zur Evaluation innovationstheoretischer Ansätze durchgeführt im Lötschental/Schweiz*. Hohenschäftlarn 1978.; A. LEHMANN, *Das Leben in einem Arbeiterdorf* (前掲注14).

バー) が個体として認識される存在であり続け、オーガニゼーション構造の背景に掻き消えはしないこと、言い換えれば、人口統計学のデータとして無名の存在へと気化してしまわないことである。ここに、民俗学という専門分野の一般的な二面性がみとめられる。一つは、《精神的》文化かつ《物質的》文化である対象が、個体の意味において問われることであり、二つ目は、この文化的対象への個体人格のはたらきかけを重視することである。この進め方による民俗学の組合研究は、具体的にはどうなるであろうか。繰り返し明らかになったのは、組合活動が成功裏に進む場合、そのメンバーの社会的な存在感が町村体のなかで高まり、当人が目指すなら、政治的なキャリア形成につながり得ることである<sup>(29)</sup>。と共に、アクティヴな個人、イニシアティヴを発揮する者や組合の設立者<sup>(30)</sup>や理事長が組合の動向に大きく関与する、というもう一方の動きも起きる。

これらも併せて、《組合と共にある生き方》が絶えず問われている。組合の内部の協働と対立の諸形態や、下位グループや、メンバーの自由時間にとっての組合の位置、さらにコミュニケーション様式と言葉遣いの見本などである。したがって、組合の生きた姿が問われるときには、視点は主に内部に、すなわちグループの動きに向けられる。そこではまた、少なくとも男性にとっては、またとりわけ結婚して家庭を構えている男性にとっては、19世紀半ば以後は、組合が、彼らの公的生活の重要な社会的・文化的な場となってきたことが明らかになる。そうした組合の生きた姿の調査にあたっては、メンバーがその活動の中心に組合の公式な事項を据えているか、それとも仲間づきあいに重きを置いているかは、どちらでもよい。言い換えれば、主要な関心が、スポーツか、歌唱か、政治的関心か、教会にかかわるか、集いのきっかけをもとめているか、といったことにすぎな

(29) これについては次を参照, Albert ILLIEN, *Prestige in dörflicher Lebenswelt* (Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts, Bd. 43). Tübingen 1977.; DERS. und Utz JEGGLE und Willi SCHELWIES, *Verwandtschaft und Verein. Zum Verhältnis zweier Organisationsformen des dörflichen Lebens*. In: Irmgard HAMPP und Peter ASSION (Hg.), *Forschungen und Berichte zur Volkskunde in Baden-Württemberg 1974-1977*. Stuttgart 1977.; A. LEHMANN, *Das Leben in einem Arbeiterdorf* (前掲注14)

(30) E. STRÜBIN, *Baselbieter Volksleben* (前掲注23), S. 169.; E. M. WALLNER, *Die Rezeption stadtbürgerlichen Vereinswesens durch die Bevölkerung auf dem Lande* (前掲注22), S. 165.; Chr. KÖHLE-HEIZINGER, *Gemeinde und Verein* (前掲注5), S. 195-197.

い。

現今では余暇活動における家庭の比重が強まる一方で、それが当然ながら決まった型になってはいるが、それでも個人にとって、組合は特別の意味もっている<sup>(31)</sup>。たしかに家庭外の活動は、今世紀初めに較べると、また戦後まもなくの時期と較べても後退の傾向にある。その原因の一部として、現代のマスメディアの影響で人々の行動に変化が起きたこと〔訳注〕テレビを視る時間の多さなど〕がどこでも観察されている。しかし村の現場をもう一度見まわし、もう一度耳をすます必要がある。組合は、多くの人々を一つの共通な活動にまとめることができるものとしては唯一の機構である。組合内部のヒエラルヒーは、組合それぞれが村の社会構造の鏡像であることを示すが、それにもかかわらず、そこでは諸々の社会層を包摂する結合がみとめられる。村の組合は、組合活動を超えて、家族どうしの交際圏に浸透している。組合での一緒の活動が個々のメンバーには経済的なメリットになることもある。それは組合が事業に関係した接触をも仲介することがあるからだけではない。組合の仲間が、親族や隣人と共に、家を建てるのに力を貸してくれる場合などである〔訳注〕ドイツの特に村落では手作りで家を建てる人が少なくない。村に住む労働者や家計が似たような状況にあるグループが第二次世界大戦後、家を持つことが可能であった事実について説明を採る人は、そうした団結の力を度外視するわけにはゆかないだろう。《組合旗の下でのスピーチ》<sup>(32)</sup>や催事のスケジュールや職務規定の議論といったオフィシャルな組合活動によって、組合は、今もなお、公共の課題への対処の仕方を覚える教育機関でありつづけている。

組合活動は、それが提供する可能性によって、親族や友人と並んで、住民が地域との結びつきを感じることに寄与している。それは、仕事もっている間は毎日村と都市を通勤しているだけになおさらである<sup>(33)</sup>。他にも、組合が人々の意識にもつ意義をうかがわせるのは、1970年代に、当

(31) W. BREPOHL, *Industrievolk im Wandel* (前掲注12), S. 301-302; H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5), S. 548-555.

(32) BAUSINGER, *Deutsch für Deutsche* (前掲注9).

(33) Jürgen HERRGUTH und Max MATTER, *Abwandern oder Pendeln*. In: *Rheinisches Jahrbuch für Volkskunde*, 22 (1978), 2. Halbband, S. 153-180; A. LEHMANN, *Das Leben in einem Arbeiterdorf* (前掲注14), S. 73-75.

時の《市町村改革〔訳注〕合併による再編》に対して組合の反撥が起きたことであろう<sup>(34)</sup>。政治的・官僚主義的モチーフによる地区の合併再編は小村の消滅につながったため、組合が、再編を受け入れない姿勢を見せたり、特殊な文化的行動によって対抗を試みたりしたのである。頻繁に見られたのは、かつては独立した村でありながら合併によって今日ではどこかの市の一区劃になってしまった場所での組合活動の活発化であった。それは屢々、特に規模の大きな村祭りとして記録されている。しかしそうした活動が多数に上った背景として、それが今日の社会の一般的な趨勢であることも明らかになる。政治的影響力の喪失の代償としての文化的な活動である<sup>(35)</sup>。

社会的な統合作用の充実にもかかわらず、組合組織は、屢々、町村体のなかでのめごとの種にもなった。またその過程で、新しい組合が結成されることも稀ではなかった。その場合は、既存の組合内部で激しい争いや党派対立が先ず起きていた。きっかけは、組合の会長選挙のこともあれば、自治体首長の選挙のこともある。組合のなかでの経済的な利害対立も、長期のめごとや分裂にいたることがある。もっとも、異なった複数の組合が社会的にさまざまな合体をすることもあるが、それまた諸々のグループへの分岐へ進んだりする。しかし組合内部のめごとは、それに限定されないのが通常である。そうした場合、組合の反統合的機能<sup>(36)</sup>を云々する前に、それぞれについて、どの程度まで組合内部すなわち《自家製の》危機であるかを検証する必要があるだろう。と言うのは、その種の軋轢は、町村体内部の一般的な危機の表面化のこともあり、それゆえ組合外部にもかかわることが考えられるからである<sup>(37)</sup>。村の文化と社会の区分が、労働者と農地所有農民のグループ分けとして現れることもめずらしくない。あるいは個々の家族と家族の間のいがみ合いや元からの住民と新来者との確

(34) 次を参照, Dieter JAUCH, *Auswirkungen der Verwaltungsreform in ländlichen Gemeinden*. Stuttgart 1975, hier S. 147-158; Albrecht LEHMANN, *Ortsbewußtsein und Gebietsreform. Prozeßanalyse am Beispiel einer niedersächsischen Gemeinden*. In: Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie, 26 (1978), Heft 1, S. 51-65.

(35) G. KORFF, *Die Regionalisierung von Kultur* (前掲注17).

(36) E. M. WALLNER, *Die Rezeption stadtbürgerlichen Vereinswesens durch die Bevölkerung auf dem Lande* (前掲注22), S. 169.

(37) Chr. KÖHLE-HEIZINGER, *Gemeinde und Verein* (前掲注5), S. 189.

執が反映されることもある<sup>(38)</sup>。たとえばかつてはドイツ全土で、軍人会(軍人・退役軍人の組合)と労働運動との対立が永々と続いていた。社会民主主義的な考え方は、それを容れない軍人会(組合)の閉鎖性の根拠となるが多かった<sup>(39)</sup>。しかしそれらすべてを押し退けて、社会民主主義者が軍人会としての諸々の組合に入りこんだ事実は<sup>(40)</sup>、村の生活世界のなかでのプレステージと組合への所属がすこぶる入り組んでいる見本であろう。

これからも知られるように、社交を主とする組合の内部は、一寸見とは逆に、非政治的などではない。組合の実際にあつては、どの活動もそれぞれ政治的であり、言い換えれば公共的な活動である。しかもここでは、政治性という言い方を特に広義で考えるには及ばない。政党性そのものと考えられる場合でも、組合の社交的な性格は依然として大きいままである。組合組織と、地域がものごとを決定する構造を区部することはほとんど不可能なのである。

村の組合の実際は、ほとんどもっぱら男性の世界である。政治的な決定の部門にも組合組織にも女性が僅かしか参加していないのは、コインの裏表と言ってよい<sup>(41)</sup>。

組合への所属、地方自治体の選挙立候補者リスト、選挙人の行動、これらが相関していることは、注意深い村民なら誰もが知っている。テュービンゲンでの調査研究は、これを細かなところまで含めて学術成果の刊行のかたちで証明した<sup>(42)</sup>。しかし組合組織と地方自治体の政治の絡みあいとなると、その多くは、ごく最近の調査研究のまで待たねばならなかった。たとえばナチ政権下での組合の実態については、ほとんど研究がなされていない。ナチス＝ドイツ体制が組合の日常にどんな影響を及ぼしていたか、

(38) H. BECK, *Der Kulturzusammenstoß zwischen Stadt und Land in einer Vorortgemeinde*. Zürich 1952, S. 105-126.

(39) G. BIRK, *Das regionale Kriegervereinswesen bis zum ersten Weltkrieg, unter besonderer Berücksichtigung des Kreises Wanzleben*. In: H. J. RACH und B. BEISSEL (Hg.), *Bauern und Landarbeiter im Kapitalismus in der Magdeburger Börde* (前掲注12), S. 265-297, hier S. 270-271.

(40) 同上, S. 272.

(41) A. ILLIEN und U. JEGGLE, *Leben auf dem Dorf* (前掲注28), S. 133-142.

(42) 同上, S. 133-142.; A. ILLIEN und U. JEGGLE und W. SCHELWIES, *Verwandtschaft und Verein* (前掲注29).

\*《翼賛》は組合活動には何を意味したか、体制への協調と、拒否や抵抗の諸形態とは《ノーマルな》組合の日常ではどういう形をとったのか、これらはなお手続かすの課題である。KPD（ドイツ共産党）とその周辺の組合数団体によって\*《赤いメッシンゲン》<sup>(43)</sup>として組織された（ヒトラー体制に反抗する）ゼネラス・ストライキの研究はめざましい例外である。特に、（体制に）抵抗し、その指導者たちが犠牲になる他なかったのは、大半が、政治的なオーガニゼーションであった<sup>(44)</sup>。《非政治的》な組合活動とその1933年から1945年に至る時期の政治との絡みあいについては、私たちはほとんど知ってはいない<sup>(45)</sup>。たしかに、《ヒトラー歌唱組合》<sup>(46)</sup>はさすがに稀な事例であった。しかし、では何がノーマルだったのだろうか？ プライヴェートな暮らしへの後退あるいは《静かな抵抗》とは何だったろうか？ \*《同調者》の組合活動はどうだったのだろうか？

### 3. 組合とメンバーの人生

筆者は先に二つの調査研究を行なった。一つはニーダーザクセン州の労働者村\*グレーネの生活実態<sup>(47)</sup>、二つ目は大都市ハムブルクを対象にしたものだが<sup>(48)</sup>、これらを簡単ながら見直すと、ヘルベルト・フロイデンタールのテーゼを批判的に考え直す手がかりになるだろう。フロイデンタールは、《組合の誕生地としての大都市は同時にその本来のふるさとであった》と言う<sup>(49)</sup>。たしかに組合は、都市の生活形態と暮らしのあり方に起源を

---

(43) Hans-Joachim ALTHAUS u.a., *Da ist nirgends nichts gewesen außer hier. Das „rote Mössingen“ im Generalstreik gegen Hitler*. Berlin 1982.

(44) Klaus TENFELDE, *Proletarische Provinz. Radikalisierung und Widerstand in Penzberg/Ostbayern 1900-1945*. 2. Aufl. München/Wien 1982.

(45) H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5), S. 339-368.; Wolfgang KASCHUBA, *Bauern und andere - Zur Systematik dörflicher Gesellschaftserfahrung zwischen Vorindustrialisierung und Weltwirtschaftskrise*. In: W. KASCHUBA und Carola LIPP, *Dörfliches Überleben*. Tübingen 1982, S. 260-285.

(46) Wolfgang KLEINSCHMIDT, *Der Wandel des Festlebens bei Arbeitern und Landwirten im 20. Jahrhundert*. Meisenheim an Glan 1977, S. 130.

(47) A. LEHMANN, *Das Leben in einem Arbeiterdorf* (前掲注14)

(48) Albrecht LEHMANN, *Erzählstruktur und Lebenslauf. Autobiographische Untersuchungen*. Frankfurt/New York 1983.

(49) H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5), S. 22.; ヴァルナーは都市と村

もっていた。問題は、都市が組合の《本来のふるさと》という断言である。筆者が調査したのは、住民2400人の町村体グレーネの労働者たちのあいだと、ハムブルクの労働者たちのあいだの2つのケースで、特に余暇をとっての組合組織の位置であった。両地での調査は個人についてであり、組合組織のオーガニゼーションとしてのパースペクティヴは考慮に入れなかった。これについては一言コメントを加えておきたい。と言うのは、労働運動にかかわるオーガニゼーションの志向や活動記録は、近年、社会史家や、また民俗学者によって、それが通常メンバーの行動ならびに意識として性急に結論付けられることが屢々起きている。それだけでもすでに危ういところがあるのは、それが労働者総体の意識にまで敷衍されること、しかも組織化から漏れている労働者にまで適用されることがあるからである<sup>(50)</sup>。いずれにせよ以下では、今日では散見される程度になった労働運動に関係したオーガニゼーションに重点を置くのではなく、むしろ組合組織全体の意味合いに注目したい。事実、民俗学ではさまざまな文化的事象を対象に設定して調査がおこなわれる。衣装、食物、歌うことなどで、個人についての質問調査であるが、組合の意義についても、同じ問い方をすることができる。組合もまた文化的な所産と言ってよい。そして個人に焦点が当てられる場合、まったく異なったアソシエーション、たとえば歌唱組合あるいはスポーツ組合を、たとえば政党と同じように扱うことになるが、それ自体は方法的に許容されるだろう。いずれにせよ、メンバーの自由意志が組合の構成的なメルクマールである。

上に挙げた2つの研究では、筆者は同じ取り組み方をした。村の調査では《ソフトな方法》、すなわち文献資料調査に観察と必要に応じて聞き取りを組み合わせた経験型を基本とした。それに対してハムブルクでの調査研究は、いわゆる《オーラル・ヒストリー》であるが、幾つかの点で共通

---

の比較の必要性を説いている。参照、E. M. WALLNER, *Die Rezeption stadtbürgerlichen Vereinswesens durch die Bevölkerung auf dem Lande* (前掲注22), S. 171.

(50) これへの批判として次を参照、Dieter LANGEWIESCHE, *Die Gewerkschaften und die kulturellen Bemühungen der Arbeiterbewegung in Deutschland und Österreich (1890er bis 1920er Jahre)*. In: IWK 1 (1982), S. 1-15, hier S. 2-4.; Detlev PEUKERT, *Arbeiteralltag - Mode oder Methode?* In: *Arbeiteralltag* (Argument-Sonderband 94), S. 8-39, hier S. 20-22.

している<sup>(51)</sup>。

1970年前後で言えば、村の工業労働者の約90%が組合のメンバーであり、また多くが複数のグループにまたがっていた。しかし、どこにでも顔を出すマルチ役員を別にすると、大半はそれぞれ特定の一つの組合にかかわっていた。この点で興味深いのは、その土地での組合活動が、各人の階層的な次元だけでなく、人生の次元をも反映していることである。

以下に挙げる組合キャリアのタイプがどの程度まで《北ドイツに特殊》であるかは横においておこう。グレーネ住民の通常の組合キャリアは、スポーツ組合に積極的にかかわることで開始する。村では、「スポーツ組合グレーネ」に機械体操とサッカーの部門がある他、テニス組合がつくられている。大半の人々は婚約あるいは結婚まで多かれ少なかれ熱心なメンバーとして練習や試合に参加する。しかし多くの人々は25歳から30歳にかけて、中にはそれ以前でも、スポーツ活動から身を引く。中には、スポーツからは退いても、その後もメンバーとして受動的にかかわる人々もいる。もとより、組合に関係した人生の第一階梯に工業前的な村の集団生活の要素をみとめるからとて、《古い学派》の民俗研究者が屢々好んだ\*ふるさとへの熱狂あるいは\*男性結社さわぎに巻き込まれる必要はない。もとより昔の若者組や隣人関係におけるのと同じく、今日でも、村の組合スポーツのなかには幾つものグループができており、グループ間では確執が起き、また長期にわたる競合関係に発展することも少なくない。遅くとも1920年代辺りからは、村落部の若い男性の場合、グループ活動は無論のこと、時折の（芝生の上かカウンターかはともかく）反目をも含めて、行動の枠組みは圧倒的にスポーツ・チームとなった。総じて、どの村でも見かける

---

(51) この調査研究の方法については次を参照、A. LEHMANN, *Erzählstruktur und Lebenslauf* (前掲注48), S. 39-61; 歴史学における自伝の資料的な位置づけについては次を参照、L. NIETHAMMER (Hg.), *Lebenserfahrung und kollektives Gedächtnis. Die Praxis der „Oral History“*. Frankfurt/M. 1980; 社会学の分野での人生歴の研究では次を参照、Martin KOHLI (Hg.), *Soziologie des Lebenslaufs*. Darmstadt und Neuwied 1978. [訳者補記] マルティーン・コーリ (Martin Kohli 1942-L) はスイスのゾロトゥルン (Solothurn) に生まれた社会学者、若者・シニアなど人生歴をレパートリーとし、1977年から2004年までベルリン自由大学で社会学の教授であった。民俗学の分野での人生歴の研究では次の拙論を参照、Albrecht LEHMANN, *Autobiographische Methoden. Verfahren und Möglichkeiten*. In: *Ethnologia Europea*, XI (1979/80), Heft 1, S. 36-54.



独身で通している男性たち（数年の新婚生活の後に再び合流した二三組の既婚者もまじっているが）がシニア仲間をつくったり、カウンターにグループでいたりするのを除けば、労働者や下積みの専門職や公務員の生き方は25歳あたりを境に変化する。多くの者が、5年から10年、ほとんどまったく家でのプライベートな余暇の過ごし方へ後退するのである。これには、特に経済的な理由がある。家庭をもち、それを維持してゆくとなると（1960、70年代は家づくりのラッシュだったが、それには組合の仲間の若者たちの協力を得た手造りもあった）、勝手にできる金銭は窮屈になる。しかし村の伝統でもある習い覚えた習慣は体にしみついている、そこで家庭を安定させる段階が過ぎると、多くの者は組合活動に再び関心を寄せる。しかし仲間と一緒に活動は、今度は概して別の形態をとり、グループの種類も違ってくる。候補に挙がるのは《大人の組合》、すなわち\*歌唱組合、\*射撃団、\*消防団である。青年期に較べると、この局面では、活動も義務もずっと縮小している。大多数の者にとっては、精々、週に一度の組合の集まり程度である。《オフィシャルな》集まりに続いて義務的なビールの席があり、それ以上、組合の夕べを超えたグループの付き合いはほとんど見られない。しかしそうではあっても、所帯主の男性には、週一回の集まりが家と家庭の外で過ごす余暇として唯一のものである（女性はほとんどどこでもそうだが祭りの時に姿をみせる程度である）。そのため組合の夕べは、時と共に強固な義務の性格を帯びるまでになる。《組合仕事》という言い方ももともともである。それは主婦にとっても安心なのであろう。組合活動へのそうした熱意に裏付けられた参加は、《人生の中年期》の特徴である。やがて60歳から70歳になると、さしも身についた習慣ながら、大半の人々はさらに退いて、組合の祭りと会長選挙に顔を出さず程度になってしまう。

かく組合キャリアは、人々の人生歴と重なって調和している。組合が、村の文化と社会へのメンバーの統合に寄与していると言えるのは、この理由からである。さらに組合が統合に資する力をまざまざと示すのは、筆者の聞き取りに応じてくれた通勤者たちの答えであろう。通勤のわずらわしさにもかかわらず現在の住まいにこだわるわけを聞かれた時、大よその理由を口にしたということだろうが、家庭と住宅と共に、住まいのある地区

での組合活動がほぼ常に挙げられた<sup>(52)</sup>。

組合との直接の結びつきをもたない人々でも、その地元意識は、村の組合組織と重なっている。そうなるのは、おおやけの村祭りをはじめ種々の組合によって組織されるからであり、また厳かな葬礼・結婚式・銀婚式といったプライベートと公共的の中間帯でおこなわれる大きめの社会的なできごととも組合によってになされるからである。その式次第を古くからの地元民は地元の特色と見ているが、その要点は形態の如何よりも、そこにこめられる強い思い入れにある。実際、ふるさとである自分の村と隣村との比較や、村の組合活動のありとあらゆることがらは、地域のコミュニケーション・システムのなかでは、《日常の語り物》のこの上ないテーマである<sup>(53)</sup>。こうして見てゆくと、理念的には、村には《語りの共同体》の要素がべったりくっついている。他の隣関でもそうであり、たとえば家庭<sup>(54)</sup>、職場、学校のクラスにおいてもそれが観察される。そのさい、隣の村々の諸関係とは多くの点で重なっているだけに、(同じ基準による) 的を射た比較になる。具体的には、その村に特別なものが中心にあらわれ、一般的なもの(どこでも見ることができるもの)は相対化されるのである。かくして組合は、多くの住民にとって、土地のアイデンティティ(ふるさと感情)を仲介する。地元の歴史への住民の意識も、基本的に、組合の歴史が基準になる。歴代の組合会長、会長の出身家族、その政治的な経歴、さらに組合の歴史も加わり、それらが個々人に歴史的な脈絡の点と線を供している。日常の歴史意識におけるそうした主観的かつ集団と結びついた尺度が、歴史意識の階層的で地域に特殊な形態の組み立てにあたって、主観的な事象推移に重要なデータをあたえてくれる。もとより、これは反対側からも言えるだろう。不調がある場合、すなわち町村体がそうした基準を示さないとか、機能を発揮するような組合活動をもっていないとかで(こ

---

(52) A. LEHMANN, *Das Leben in einem Arbeiterdorf* (前掲注14), S. 73-75.

(53) Hermann BAUSINGER, *Lebendiges Erzählen. Volkskundliche Gegenwartsuntersuchungen im schwäbischen Dorf*. Diss. Tübingen 1952.; Albrecht LEHMANN, *Erzählen eigener Erlebnisse im Alltag. Tatbestände, Situation, Funktion*. In: Zeitschrift für Volkskunde, 74 (1978), S. 198-215.

(54) Robert D. HESS und Gerald HANDEL, *Familienwelten. Kommunikaiton und Verhaltensstile in Familien*. Düsseldorf 1975.

れには組合のなかでの確執その他の原因が考えられるが) 危機が走っているときには、比較は、個々人のあいだに町村体からの離脱を惹き起こし、社会的な反統合へ進んでゆく

調査をおこなった村の120年の歴史には、今挙げたことがらがあてはまる。この《労働者の村》の社会と文化への労働者の統合が可能となったのは、村の組合組織が早くから彼らに門戸を開いていたためであった。なおこのケースでは、ミクロな分析の研究を社会全体の関係に応用する場合は常にそうなのと同じく用心が必要で、地域的・歴史的特質を計算に入れなければならない。しかし20世紀の今日に至るまで、ドイツでは工業労働者の三人に一人は、仕事が終わると《村落地域の》諸関係のなかで暮らしているという現実がある。この観点からは、村の組合組織の社会文化的な意義はどれほど評価しても評価しすぎではない。

いずれにせよ、そうした調査結果は、大都市ハムブルクの事情と比較すると、特別の重みをもってくる。筆者の調査に応じてくれた労働者の場合、(労働組合と政党を除いた) 組合のメンバーと答えたのは僅か10人に1人にすぎなかった。この点で重要なのは、筆者のインフォーマントは全員が1920年頃の生まれであり、1933年以前にハムブルクの労働運動とも相俟って文化関係の大衆オーガニゼーションが大発展したときの組合メンバーでは未だなかったことである。《村落的》な環境の労働者たちの場合と同じく、彼らについても、組合活動の経歴の起点はスポーツ活動である。ほぼ三人に一人が、少年期には組合スポーツに積極的に参加していた。しかしアクティブな時期が終わると共に、組合とのコンタクトはたちまち切れるのが一般的で、それが村の場合とは違っている。そうした組合との距離が大きくなる原因として彼らが挙げるのは、過重な勤務である。特に早朝と仕事が終わってからの車での帰宅である。仕事の後は家でゆっくり休養するのが何より、と彼らは言う。この説明を聞くや、併せて思いだされるのは、ニーダーザクセンの村から通勤する人々の組合への帰属ぶりである。それは通勤によってもほとんど妨げられていない。逆に、組合は彼らにとって、村の政治・社会への重要な連結項となっている。

筆者のハムブルクのインフォーマントたちは、毎日のストレスの他にも、組合組織に距離をおく理由を挙げてくれた。\*公務員や専門職、それに特

に商店主〔訳注〕いずれも社会的・経済的に概ね労働者より上位）が大きな顔をしていることである。インフォーマントたちの見方では、これらのグループの力が強いことは、組合のオーガニゼーション構造や目的設定をめぐる会議での進め方を決定している。加えて、組合は、経済的な方向の目的団体になっていると、とも言う。もっとも、都市の組合活動への労働者たちの批判の一部には、近年姿をあらわした市民運動への反撥も重なっている。実際、市民運動は、多くの点で、組合組織と等価な〔訳者補記〕競合するところがある。

そうした論議は、筆者のインフォーマントたちの独自の人生経験から得られたものだった。そこで聞かれるのは、ハムブルク市の組合組織のなかの社会的脈絡についてフロイデンタールが聞かせた見解とは真向うから対立している。先にふれたようにフロイデンタールは、圧倒的に多数の組合が身分の反映の点では政治的にニュートラルであり、実際の活動でもどの階層にも風通しがよいと論じていたのである<sup>(55)</sup>。筆者のインフォーマントたちの声は、マインツのファスナハトを実行する組合組織について\*ヘルベルト・シュヴェートが得た調査結果ともたいてい一致する。シュヴェートは、それらの組合が、中流市民ならびに小市民、すなわち労働者よりも上位の人々の活動の場であることを明らかにしたのだった<sup>(56)</sup>。

生き方の模範としての《手づくり》は、大都市の労働者には、村の労働者にとってよりも概して強くうったえる。大都市の華やかな催し物のカレンダーにもかかわらず、そうした傾向がみとめられるのである。

ニーダーザクセンの村の労働者たちは、自分たちの村が特別であることを、地元の組合活動の質に見ている。特にそれを形づくるにあたっては、みずから参加し、それが、住んでいる場所との直接的なアイデンティティへつながってゆく。

筆者が聞き取りをしたハムブルクの労働者たちも、組合のメンバーではない者も含めて、この都市をふるさとと感じている<sup>(57)</sup>。誰一人として、大

---

(55) H. FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg* (前掲注5), S. 463.

(56) H. SCHWEDT, *Stadtfest und Stadtkultur*. In: G. WIEGELMANN (Hg.), *Gemeinde im Wandel. Volkskundliche Gemeindestudien in Europa. Beiträge des 21. Deutschen Volkskundekongresses 1977* (前掲注25), S. 167–172, hier S. 171.

(57) A. LEHMANN, *Erzählstruktur und Lebenslauf. Autobiographische Untersuchungen* (前

都市の生活にも、ハムブルクという特定の都市にも心底から忌避感をもつてはない。よく使われてきた都市のシンボル<sup>(58)</sup>のなかには、港や\*ミヒェル（〔訳注〕大聖堂の愛称）や\*レーパーバーン（〔訳注〕歓楽街として知られる）<sup>(59)</sup>や著名な\*政治家やテレビタレントと並んで、労働者のあいだでも組合が挙がる。\*「ハムブルガー SV（ハムブルク・スポーツ組合）」、とりわけそのサッカー・チームである。そこでのアイデンティティへの歩みは、政治家やテレビタレントの場合と同じかたちをとる。メディアを通して、したがって《セカンド・ハンドの経験》としてである<sup>(60)</sup>。住んでいる場所との結びつきの意味でのアイデンティティとなると、はっきりしてはしない。しかし、《大都市の無名性》<sup>(61)</sup>や大都市の構造の不透明性のなかで組合への所属が、周りの社会との《折り合い》を与えてくれることを見るなら、この視角からも、大都市に生きる労働者の市民社会への社会的・文化的統合の形態や度合いを問うことができるだろう。

## 訳注

- p. 85 **経験型文化研究** (empirische Kulturforschung) 第二次世界大戦後の民俗学の再建の過程で特に1950年代末から1960年代に、民俗事象を幽遠な上古からの名残りと見るのではなく、社会学の实地調査 (empirische Sozialforschung) とも重なる方向で、伝統文化をも現代の様相としてとして調査・考察する必要があることが主張された。オピニオンリーダーはチュービンゲン大学教授ヘルマン・パウジンガーで、その主宰する民俗学研究所は「経験型文化研究のためのルートヴィヒ・ウーラント研究所」と改称された。

---

掲注48), S. 176-180.

(58) これについては次を参照, Heiner TREINEN, *Symbolische Ortbezogenheit. Eine soziologische Untersuchung zum Heimatphänomen*. In: Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 17 (1965), Heft 1, S. 73-97, Heft 2, S. 254-297.

(59) 有名な建築物のシンボル性については次を参照, René KÖNIG, *Großstadt*. In: DERS. (Hg.), *Handbuch der empirischen Sozialforschung*. 2. Aufl., Band 10. Stuttgart 1977, S. 42-145, hier S. 99-100.

(60) 《セカンド・ハンドの経験》(Erfahrung zweiter Hand) の術語はアルノルト・ゲーレンの哲学に由来する。そこでは、この言い方で主に、工業と官僚主義のシステムの下での疎外が考えられている。参照, Arnold GEHLEN, *Urmensch und Spätkultur. Philosophische Ergebnisse und Aussagen*. 4. Aufl., Frankfurt/M. 1977, S. 111.

(61) この概念については次を参照, Elisabeth PFEIL, *Großstadtforschung. Entwicklung und gegenwärtiger Stand*. 2. Aufl. Hannover 1971, S. 238-244.

- p. 86 **有機体的な物の見方** (organizistische Sichtweise) 村落共同体や人種・民族的な自生的・自然的な繋がりを現行の諸集団に仮託する考え方。社会有機体説や、国家有機体説などの形で20世紀前半の思想界に力を持ち、一般通念化も起きた。
- p. 86 **きづなによる** (bündisch)、**ゲマインシャフト的** (gemeinschaftlich)、**秘密結社** (Geheimbünde) いずれも(源流は19世紀に遡るが)1920年代から高まった社会有機体論のキーワード。ナチスによる濫用を経て、今日ではネガティブな意味合いを持つことが多い。
- p. 86 **フェルディナント・テンニェス** (Ferdinand Tönnies 1855-1936) 北フリースラントの町オルデンヴォルト (Oldenswort SH) に生まれ、キールに没した社会学者。1887年の主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で知られる。しかし現代では、その学説は学問的には熟したものではないとみられるなど、限定的にとらえられることが多い。
- p. 86 **分析のカテゴリー** (analytische Kategorie) ……**社会の実情を名指すこと** (Beschreibung einer sozialen Wirklichkeit) 概念(術語)の学術性を批判的に説明するときに屢々もちいられる対比。この図式で《ゲマインシャフト》の概念の限界を指摘したのは社会学者ルネ・ケーニヒであったが(1955年の『ケルン社会学誌』上の論説および1959年の『社会学事典』での《ゲマインシャフト》の項目解説)、レーマンはその後の議論を念頭にその批判作業が不十分であったことに触れている。
- p. 87 **ハインツ・シュミット** (Heinz Schmitt 1933-L) ヴァインハイム (Weinheim/Bergstraße) に生まれた図書館人・博物館人。ハイデルベルク大学とチュービンゲン大学でロマニスティク・ゲルマニスティク・地理学・民俗学を学び、1963年に出身地ヴァインハイムのフェルアインの調査研究によって民俗学の分野で学位を得た。ここで取り上げられているフェルアインの研究は主著と言ってよいが、それにあたっての指導教授の一人がヘルマン・パウジンガーであり、そのフェルアイン理解に沿っている。
- p. 87 **ヘルベルト・フロイデンタール** (Herbert Freudenthal 1894-1975) ハムブルクに生まれ、リュウベックに没した民俗学者。第一次世界大戦に義勇兵として出征して叙勲され、復員後、ハムブルク大学で教育学・歴史学・民俗学を学び、1927年に火をめぐる俗信・迷信の研究で学位を得た(1931年刊)。ナチスの積極的なメンバーとしてキャリアを重ねたために、戦後は批判を受けた。それからの脱皮の意図もこめて、ゲオルク・ジムメル理論に沿う形でハムブルクの多種多様なフェルアインの歴史を実態調査をも交えて研究

し、その成果は資料価値が高い。

- p. 89 **ハリル・ナルマン** (Halil Narman) の言う《**一時の同化**》トルコ人のドイツ社会への参入についてトルコ人学者の走りであるナルマンが世に問うた研究成果として話題を呼んだ次の著作を指す。Halil Narman, *Türkische Arbeiter in Münster. Ein Beitrag zum Problem der temporären Akkulturation (Turkish workers in Munster. A contribution on the problem of temporary acculturation)*. Münster, Coppenrath, 1978.
- p.89 **宗教的なゲマインシャフト** (religiöse Gemeinschaft) 厳密な(学術的な)概念ではないが、概括的ないしは比喩的な表現として、大は国境を越えたキリスト教世界から小は地域の教区的なまとまりまでを指す語として時々もちいられる。ここでも、いわばといったニュアンスがある。
- p. 89 **組合スポーツ** (Vereinsport) ドイツのスポーツの組織形態ではこれが一般的である。たとえばサッカーのブンデスリーガ所属チームを要する大きな団体から、数人の小規模なものまで幅は大きい。学校児童の放課後のスポーツ活動の担い手でもある。
- p. 89 **フォークロリズム** (Folklorismus) 民俗学の用語で、民俗事象(祭り行事や民俗衣装など)が、表面上は昔ながらであるが、(現代なら現代の文化の全体の仕組みのなかで)昔とは異なる機能と意味をもって行なわれることを言う。1960年代前半にバウジンガーとハンス・モーザーによって民俗学の概念として導入された。
- p. 90 **輪突き騎馬行事** (Ringreiten) 空中に渡されたロープに円環状の飾りを吊るし、ロープの下を騎馬で駆け抜けつつ、槍状の棒で突き取る競技。一時期キール大学教授であったクレツェンバッハーは、この行事を古代ローマの《兵營の比武》にまで遡って文化史的に考察した。バウジンガーはこれを《**連続性**》概念の検証において取り上げた。次の邦訳を参照、バウジンガー『**フォルクスクンデ**』(原注1), pp. 84-86.
- p. 91 **さかさまの世界** (verkehrte Welt) ……《**反対世界** (Gegenwelt) カーニヴァルにおいて明示される普段の社会の反対象を指す。
- p. 91 **儀礼と行事** (Sitte und Brauch) 慣行と習俗とも訳され、民俗学の主要な研究対象である民間習俗と祭り行事などを指す言葉として定着してきた。
- p. 91 **隣人組** (Nachbarschaft) 隣近所の関係・近所付き合いの意味にもなるが、古くは組織体の性格を帯びていた。
- p. 92 **献堂祭** (Kirchweih 秋祭り) 教会堂の開基(献堂)の日に因む例祭が原意であるが、歴史を通じて秋季にまとまった。10月及び11月の日曜で一定

していなかったが、19世紀を通じて10月第3日曜に統一された。時代が進むにつれて世俗的な祭りの側面が強まった。

- p. 93 **クリスティアン・フォン・フェルバー** (Christian von Ferber 1926-L) シュヴェリーンに生まれたドイツの社会学者・経済学者。1956年にゲッティンゲン大学で労働者研究で学位を得て、ヘルムート・ブレスナーの助手となった。ビーレフェルト大学でしばらく教えた後、デュッセルドルフ大学教授となり、定年後はケルン大学を研究拠点とした。産業社会学をレパートリーとして、また医療社会学を開拓した。
- p. 93 **経験型社会学** (empirische Soziologie) 一応この訳語を当てておく。なお近似した empirische Sozialforschung は《社会調査》と訳される。ここで言われるのは、統計による社会動向の把握が量的方法であるのに対して、インフォーマントからの聞き取りや対面調査によって心理的な要素をも含めた現象の把握を重視する《質的方法》を指し、第二次世界大戦後の学問方法の見直しにおける議論のテーマの一つであった。
- p. 98 **翼賛** (Gleichschaltung) ヴァイマル時代に機能していた諸々の組織をナチスの機関に統合する政策を言う。《強制的同一化》とも訳されるが分かりにくい。ナチスは部門ごとに国家指揮官を設け、たとえば労働組合を解散させて国家指揮官ローベルト・ライの「ドイツ労働戦線」に統合し、また体操組合とその全国組織を国家スポーツ指揮官ハンス・フォン・チャマー＝ウント＝オステン「ドイツ体育同盟」に統合するなど、多くの分野で編成替えを進めた。末端でも、業界組織から祭りの保存会まで無数の団体がヒトラーを会長や名誉会長に推戴した。
- p. 98 **赤いメッシンゲン** (das rote Mössingen) 《メッシンゲンのゼネスト》(Mössinger Generalstreik) と呼ばれるできごとを指す。メッシンゲンはバーデン＝ヴュルテムベルク州テュービンゲン郡の都市で当時の人口は約4200人(現在は約2万人)。20世紀前半には特に繊維関係の中小企業が集まっていた。1933年1月のヒトラーのドイツ首相への就任に際して、それへの抗議のために労働者主体のフェルアイン数団体のメンバー約200人が1月30日夕方、メッシンゲンのラングガス体操ホール(Langgass-Turnhalle)に集まり、翌31日に行動を起こすことを申し合わせた。中心人物は絵師のマルティーン・マイヤー(Martin Maier)であった。翌1月31日、マイヤーはドイツ共産党の地区責任者フリッツ・ヴァンデル(Gottlob Friedrich [Fritz] Wandel 1898-1956)を迎えに行き、一緒に昼12時30分に体操ホールへ入った。約100人の失業者と手仕事労働者が集まっており、短い討議の後、午後



1時に準備していたプラカードを掲げてデモ行進に出発した。デモ隊は、《くたばれヒトラー！ Hitler verrecke!》、《ヒトラーでは戦争になるぞ Hitler bedeutet Krieg!》を叫んだ。デモ隊は先ず繊維会社パウザ社(Pausa)へ向かった。そこでは従業員集會が開かれ、賛成53反対42でストライキが決議された。工場オーナーのレーヴェンシュタイン兄弟(Artur und Felix Löwenstein)はユダヤ人で、かねてナチスの攻撃にさらされていたため、従業員の決定を受け入れて午後を休業とした。その人員も加わったデモ隊は、次に、メッシンゲンで最大の工場である従業員400人のトリコット製造会社メルツ社(Merz)へ赴いた。同社の労働者たちはストライキに賛成し、デモ隊は約600人に増加した。三番目に繊維会社ブルクハルト社(Burkhardt)に到着したが、そこでは数人の従業員が賛意を示しただけで、工場の入り口と窓をはさんで応酬ともみ合いの後、約800人となっていたデモ隊は元の体操ホールへ引き返しはじめた。その間、メルツ社のオーナー、オットー・メルツは、メッシンゲン市長カール・ヤギに対処をもとめたが、市長は、そのうちに収まるとして静観を勧めた。メルツは納得せず、広域を統括するロッテンブルク管区の長官に事態収拾をもとめた。行政側で連絡が行き交い、午後4時には隣町のロイトリンゲンから武装警官40人がピストルとゴム警棒を携行して到着し、体操ホールへ引き返すデモ隊の行く手をさえぎった。小競り合いの後、デモ隊は解散を決定し、参加者は畑を走って四散した。翌日から警察の捜索がはじまり、数か月の間に、計画への加担者もふくめて近隣の数市町村から98人が逮捕され、以後の裁判によって3か月から2年半の禁固刑に処せられた。ナチ政権成立時に起きた同政権下では唯一の組織的な反体制行動であった。ただしヴァイマル時代末期にはナチスとドイツ共産党の双方のデモ隊の衝突はしばしば起きており、武装警官が割って入ることも珍しくなく、その最後の事例と見ることもできる。メッシンゲンでのストライキについては、ナチス=ドイツ期には情報の拡散が抑えられ、また戦後もドイツ共産党への用心から西ドイツでは話題にされることが少なく、全容の解明は遅れた。パウザ社の工場は現代史遺産として保存の声が挙がっていたが、2000年代に取り壊された。集会場となった体操ホールは改装されてはいるが現存する。ここでの文脈では、労働者のフェルアインが行動の主体であったことと、行動の拠点となった体操ホールが労働者フェルアインのイニシアティブで1925年に建設された施設であったことが注目される。なお行動の中心が繪師(Maler)であったのは奇異ではなく、伝統的に繪師は村や町には不可欠のインテリア職人で、建築の室内外装飾だけでなく、冠婚葬祭への関りなど

- 幅広い仲介者であったため、村の出来事の記録にはよく登場する。
- p. 98 **同調者** (Mitläufer) 第二次世界大戦後のナチス批判において使われた用語。ナチス加担者とまではゆかないが、状況からナチスに同調したとして比較的軽い譴責の対象とされた。多くのナチス嫌疑者がこの分類で罪を軽減されるなど、嫌疑者の実刑を免れさせるための分類項目という一面もあった。
- p. 98 **グレーネ村** (Greene) ニーダーザクセン州南部に位置し、現在はアインベック市 (Einbeck) の一区割で、現在の人口は約1,400人。
- p. 100 **ふるさとへの熱狂** (Heimattümmelei) 1920年代から《ふるさと》(Heimat) に特に意味をもたせる傾向は、19世紀末の《ふるさと祭り Heimatfest》の生成が早いエポックで、今日では伝統的と見られているものも少なくない (ハーメルンの「ネズミ捕り男まつり」など)。以後もその傾向は続き、第二次世界大戦後も何度かの高まりを見せた。
- p. 100 **男性結社さわざ** (Männerbündelei) 秘密結社 (p. 86) への訳注を参照
- p. 101 **歌唱組合** (Gesangverein) 男声合唱を主とする歌唱団体はフェルアインが活発化した19世紀初めに最初のエポックを迎えた。並行していた体操組合がメッテルニヒの指令による《体操禁止令》によって存在できなくなる状況下、合唱組合が祖国統一とデモクラシーの理念の大きな担い手となった。ドイツ帝国の成立後は体制化すると共に、労働者合唱組合も盛んにつくられた。歴史的には政治理念の担い手であり、その後はふるさと文化保全に傾き、そのためこの数十年では高齢者の集まりのイメージがある。
- p. 101 **射撃団** (Schützenverein 射撃組合) 射撃団は、理念的には中世をはさんだ時代の町村体の自衛団に遡る。武器をもちいることから、町村の名士や有力な家柄の集まりの性格もっていた。
- p. 101 **消防団** (Feuerwehr) 消防体制は二段構えになっており、自治体が設けている特殊技能者の専門部署の外に、ここで言われる組合がある。ヴォランティア的であり、消防活動では二次的な組織であるが、全国規模で独自の訓練学校ももっている。
- p. 103 **公務員や専門職……商店主……** 雇用の2つの基本形式が関係する。公務員・専門職は Angestellte/er として個々人の専門技能の提供を骨子とする雇用契約が結ばれる。それに対して Arbeiter は他の者でも代替が利く人員、したがって掛け替えの無い職能の持主とはみなされない。このため大学卒業者は専門的な職能者として就職しなければ意味がないとの感覚があり、社会情勢によっては大学卒業者に失業状態を選択させることがある。商店主も自己の才幹による運営者として専門的な職能者の性格を持つ。

- p. 104 **ヘルベルト・シュヴェート** (Herbert Schwedt 1934-2010) シレジアのボイテン (Beuthen 現在はポーランド領) に生まれた民俗学者。チュービンゲン大学の民俗学研究所であるルートヴィヒ・ウーラント研究所の助手を経て、マインツ大学教授として民俗学科を主宰した。バウジンガーと共に引揚民研究『新しい移住団地』(原注14)の調査を行なった。民俗行事の分野に厚く、エルケ夫人との共著に『シュヴァーベンの民俗：年中行事と人生儀礼』(文楫堂2009, 原書 *Schwäbische Bräuche*. 1986)がある。
- p. 105 **ミヒェル** (Michel) ハムブルク市の大聖堂 (プロテスタント教会) ザンクト・ミヒアエリース (St. Michaelis) の愛称
- p. 105 **レーパーバーン** (Reeperbahn) ハムブルクのザンクト・パウリ地区にある歓楽街。ドイツ最大の港町でもあるハムブルクらしく規模も大きく世界的に知られている。ビートルズの初期の活動拠点の一つでもあった。
- p. 105 **政治家・テレビタレント** ハムブルクは大都市のため、ここを出身地や活動拠点とする著名人は各分野にわたり多数をかぞえる。第二次世界大戦後では、政治家では聯邦首相をつとめたヘルムート・シュミットがいる。またこの論文より後になるが、アンゲラ・メルケル首相はハムブルクの生まれで幼年時に牧師の父の赴任によって東ドイツへ移住した。テレビタレントでは、この論文の時期では俳優ハンス・アルベルス (Hans Albers 1891-1960) や女優イングリッド・アンドレ (Ingrid Andree) がいた。またテレビ司会者トミー・ゴットシャルク (Thomas Gottschalk 1950-L Tommyは愛称) は出身地はバムベルクながらハムブルクのグミ会社のCMで知られた。現代では人気俳優ユルゲン・フォーゲル (Jürgen Vogel) が出身者である。
- p. 105 **ハムブルガー SV** (Hamburger SV [=Sport-Verein]) ハムブルクを本拠地とするスポーツ組合。

## [解説]

本稿はドイツの民俗学者アルブレヒト・レーマンの論文の全訳である。直訳は「民俗学のクラブ・組合研究に向けて」であるが、これはフェルアインをめぐる共同論集としてテーマが予め明らかであり、それへの寄稿という性格によっている。そのためタイトルを少し調整した。書誌データは以下である。

Albrecht Lehmann, *Zur volkswissenschaftlichen Vereinsforschung*. In: Otto Dann (Hg.), *Vereinswesen und bürgerliche Gesellschaft in Deutschland*. München [R. Oldenbourg] 1984 (Historische Zeitschrift, Beihefte, Neue Folge, hrsg. von Theodor Schieder, 9), S. 133-149.

## [論者の略歴]

アルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann) は1939年に当時はドイツ領であったシレジアのオーバーラウジッツ地方ルバン (Lubań独名ラウバン Lauban) に生まれた。ゲッティンゲン大学で社会学・教育学・歴史学を学び、1975年にニーダーザクセン州の労働者村の民俗研究によって学位を得た。1981年に「語り物の構造と人生歴」の研究で教授資格を得た。1985年にハムブルク大学教授となり、同大学の民俗学科と研究所を主宰し、2005年に定年退官となった。主要な著作などの解説は、今回は紙数の関係で省く。

レーマンは2010年に日本民俗学会の大会に合わせて招待来日し、同年の大会の他、数か所で講演をおこなった。それには岩本通弥東京大学教授を中心としたドイツ民俗学に関心を寄せる諸氏がレーマンに焦点を合わせてドイツ民俗学の動向を探ってきたことが与っている。第二次世界大戦後のドイツ民俗学を牽引してきた第一・第二世代の次に来るジェネレーションではレーマンは有力な一人であり、とりわけ社会学と接する研究姿勢で口承文藝に臨んでいることでは、口承文藝への関心が強い日本の動向と交差するところがある。

## 本稿について

本稿のテーマは、レーマンの業績のなかでは、日本でのこれまでの関心とはややずれるかも知れない。書誌データに挙げたように、1984年にドイツの近代史家でケルン大学教授のオットー・ダン (Otto Dann 1937-2014) が共同論文集『フェルアイン (クラブ・組合) とドイツの市民社会』

を企画・編集した。主要には歴史研究で、フェルアインを18世紀末から現代に近い時代まで幾つかに区分して歴史家たちが分担執筆した。そして最後に社会学と民俗学からこのテーマへの寄稿が組み込まれた。両分野における問題意識と取り組みの概観が課題で、そのうち民俗学をレーマンが担当したのである。学位論文の労働者村の研究がフェルアインの实地調査を踏まえていたことから、最も知見をもつ一人であった。のみならず、レーマンのその後の研究にも初期の研究視角が多かれ少なかれ活かされている。

テーマとなったフェルアインとは何か、またこのレーマンの論文の細かい特徴について解説を加えるべきところだが、二点に絞る。

先ずドイツ語で《Verein》と呼ばれるものについては、ここでは主に組合あるいはクラブ・組合と訳した。日本でも古くから知られており、初期の訳語は、明治32年に制定された商法の第52条（会社法の最初の条文）中の、また平成17年の大改正後も継続してもちいられている《社団》である。法人化されると《社団法人》であるが、当時その語は株式会社などをも含む広義であった（株式会社団という言い方がなされていた）。現在ではドイツでも、会社形式の経営体は含めず、Vereinは主に社団法人・組合・クラブを指すようになっている。もっとも、そうした法的・社会的性格にある団体は、それまた多様である。ドイツ自動車工業会のような巨大企業の連絡機関から町の花屋さんや肉屋さんの組合、さらにありとあらゆる文化・ホビーの集まりにまでわたっている。ほとんどの学会組織もフェルアインである。また特に日本で知られているのはスポーツ関係で、サッカー・チームを運営している団体として「ボルシア・ドルトムント」とか「ハムブルガー SV」とかは（日本人選手の在籍先として）耳に親しい。SVはスポーツ・フェルアインの略称である。

そうした団体が生活の実際に幾重にもからんでいるのはドイツだけでなく、多くの西洋諸国に共通と言ってよい。たとえば学校児童の放課後のスポーツの活動場所となっている団体もそうである。これについては別稿で触れたこともあるが、そうした身近な集団のあり方を歴史に遡って学問的に整理しようとしたのが近代史家オットー・ダンの企画であった。そこに民俗学が加わったのは、日常研究の側面から研究を蓄積していたからである。民俗学界でフェルアイン研究の重要性を説いたのはヘルマン・パウジ

ンガーであるが、レーマンもその刺激の延長線上に位置している。

二つ目に今日との対比にふれておきたい。本稿が書かれた1980年代半ばは、民俗学の分野でフェルアイン研究が始まってから現在までのほぼ中間の時期にあたる。それは単純に時間だけのことではない。以後、研究は多様化し、その点では本稿は里程標の一つである。言い換えると、たしかにフェルアインをめぐる歴史的・社会的現実は大筋では本稿が分かりやすく整理している通りであるが、今日では、レーマンの本稿の頃にはまだあまり意識されていなかった角度からの研究にも目を惹くものがある。その端的な事例は女性史との関りであろう。レーマンの本稿が組合と家庭生活の関係について一つの型を抽出するところまで進んだのは、労働者村の実地調査を背景にした大きな知見であった。そこでの指摘の一つ、《村の組合の実際は、ほとんどもっぱら男性の世界》であり、女性は家族のなかの男がかかわるの団体の祭りに加わる程度というのは、たしかに事の一面であり、大勢でもあった。しかし近年では、教会関係をはじめ組合の広がり注目することによって、女性が主体の場合や組合における女性の存在意義を掘り起こす歴史研究の成果が現われている。またレーマンの本稿から一世代余りの間の現実の変化でも、女性の組合会長が珍らしくなくなっている。これは研究動向と現実の一例だが、そうした変化も今後は組み込む必要がある。またそこから改めて本稿の整理の意義が見えてくることになるだろう。

なおドイツ民俗学は本邦ではほとんど未紹介のため、キーワードには訳注をつけた。特にナチス＝ドイツへの抵抗運動《赤いメッシンゲン》(p. 98)はやや詳しく説明した。フェルアインが関係すると共に、ドイツ現代史のもっと知られてもよい一齣だからである。この政治的な事件を多角的に解明したのはテュービンゲン大学の民俗学のグループで(原注43の文献)、さらにメッシンゲン市の戦後の労働者の動向をについても共同研究の成果が刊行されている。

なお邦訳にあたり版權等でレーマン教授の好意を得たことを付記する。

S.K. July '19